

◆2021年2月第1週のメッセージ

■日時：2021年2月7日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「目を覚ましていなさい。」

■聖書：マルコによる福音書第13章28－37節

■讃美歌：149「わがたまたえよ」・460「やさしき道しるべの」

お早うございます。

2月の第1主日を迎えました。

1年の12分の1が過ぎ、今月は、私たちの教会が創立70年目を迎える時となります。

創立を覚えての70周年記念礼拝説教は来週行い、又、緊急事態宣言が終わりとなされている3月7日以降、通常の礼拝に戻ってから、改めてご一緒に感謝の時を持ちたいと思います。

今日与えられた聖書の箇所は、イエス様が受難の時を迎える前の、最後の話しとなります。第13章28、29節です。

28：「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことがわかる。

29：それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。

聖書には、良くいちじくの木が登場します。

イエス様の姿を一目見ようと、徴税人ザアカイが登っていたのも、いちじく桑の木でした。

いちじくの木は、夏に実を結び、収穫の時を迎えます。この木に新しい葉と新しい芽が伸びる時、それは冬の終わりを告げる合図でした。

それと同じように、イエス様が、13章5節以下で語られた様々な事象が起きるのを見たら、終末が近づいているのを悟れと言われます。

ところで、イエス様がなぜ、この時期に終末の話しをされたのでしょうか。

ご自分の十字架による死が近づいている。

それは愛する弟子たちとの別れの時です。

その前に、どうしても言うておかなければならないことがありました。

自分が去った後に弟子たちを襲う迫害の嵐です。

ユダヤ教徒から、あるいは異邦人から、弟子たちが厳しい迫害を受けることがイエス様には分かっていました。

その迫害を耐え忍ばせ、神の国に迎え入れるには、どうしても知らせておかなければならないことがあったのです。それは、終末の出来事でした。

終末とは、この世の終わりではありません。

イエス様を神の子と信じ従う者には、救いの完成を意味しています。つまり、終末とは、神の国に招き入れられる勝利の時なのです。

別れの時が訪れる前にそのことを弟子たちにしっかりと知らせておかなければなりません。

30 節、31 節です。

30：はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。

31：天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

私たちにとって、とても大切な内容です。

30 節の「はっきり言うておく」ですが、イエス様がこの言葉を語られる時、そこには特別の内容が秘められています。

即ち、「これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない」のです。

この時代と言うのは、私たちが生きて、今在る現在の時です。

イエス様は、この世を救うために遣わされました。

十字架と復活において、私たちの罪の救しを成し遂げられた後、イエス様は、神様の御許に帰られました。そして、再び世に来られます。その再臨の時までの間、それが、今この時です。

私たちは、イエス様が世に来られ、再びお出でになる時までの時間を生きています。

そして、その間にこそ、なすべき務めが与えられています。

一人の者も滅びることなく救いに与らせる務め、即ち伝道です。

イエス様はいつ来られるか分かりません。

しかし、分からないからこそ、いつ来られても良いように、一人も滅びることのない伝道の業に励むように言われているのです。

「これらのことがみな起こるまで」、今はまだ与えられている時があります。「この時代」が滅ぶまで、まだ時があるのです。

そして 31 節です。

「天地は滅びる」、しかし「わたしの言葉は決して滅びない」と言うのです。

天地万物の創造主である神様が造られたこの天地は、神様の意思のもとにあります。

そして、神様から遣わされたイエス様が語る言葉は、神様によって与えられた言葉である。それは、決して滅ぶことはないと言うのです。

神様が創られ、支配される天地です。

世の歴史の全ては神様の意思のもとにあります。

だからこそ 32 節。

32：「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。のです。

イエス様の言葉は続きます。

キリスト者としていかに生きるかの、日々の生活に対する戒めです。

33 節から 36 節。

33：気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。

34：それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。

35：だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。

36：主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。

この 33 節から 36 節までの 4 節に、「目を覚ま」と言う言葉が 3 回使われています。

「目を覚ます」と言う言葉の本来の意味は、「眠気を捕まえて、追放する」ことです。

34 節にある門番の仕事は、主人が帰って来た時に門を開けることでした。

つまり、私たちの仕事は、イエス様が再び来られる時にいつでも門を開けられるように、己の仕事に忠実であることです。

一人でも多くの者に福音を知らせ、救いに導くこと、そのために、常に目を覚まし、福音宣教の業に従事することが求められています。

そして、イエス様のこの言葉は、ペトロなど限られた 4 名の使徒だけに語られているのではなく、全ての弟子たちに与えられた言葉でした。

37 節。

37：あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

「目を覚ましていなさい」。

この言葉は、私たち一人ひとりに語られている言葉であることは勿論ですが、私たちが招かれ、呼び集められている、私たちの教会に向かつての言葉でもあります。

私がこの教会に赴任してから間もなく5年の時が過ぎ、6年目に入ります。

この5年間の立川教会の歩みを顧みる時、私たちは本当に神様に守られ、導かれて来たと思えます。

神様は、こよなくこの教会を愛されています。

この5年の歩みを振り返る中で、私は本当にそう思うのです。

その第一の理由は、何よりも、二度にわたる緊急事態宣言の中で、礼拝が守られ続けていることです。昨年4月と5月、今年に入っての1月と2月、皆で集まったの礼拝が出来なくなりました。しかし、それに代わって、一度として休むことなく、オンラインではありましたが、礼拝を続けることが出来ましたし、今も続いています。

このようなことは、私にとっては奇跡としか思えないのです。

第1回目の緊急事態宣言の時、立川教会では直ちに礼拝を録画して配信することが出来ました。中国語礼拝の通訳の任を負って下さっていた飯田仰牧師のお力によって実現したのです。もしも中国語礼拝が行われていなかったら、飯田牧師と言う存在が得られていなかったなら、礼拝の配信は出来ませんでした。立川市内に在住する中国・台湾の方に伝道した

いと願いによって始まった中国語礼拝は、神様によって礼拝の動画を配信する準備の時ともなったのです。

そして、その土壌の中で、次には神学校のクラスメートである齊藤篤牧師のお力によって、夢であったライブ礼拝が実現しました。

この動画の配信とライブ礼拝は、神様によってお二人の方が備えられ、実現出来ました。

さらに、2017年から2019年まで、細川芙美江先生が共に礼拝を守って下さいました。礼拝だけではありません。細川先生のお力なくしては、「懐かしい歌を歌う集い」を開催することは出来ませんでした。

奏楽者のいない中で、他教会員である川谷淑子さん、江村悠子さん、江詩吟さん、入江玲子さんが奏楽の奉仕をして下さっています。夕礼拝には、一組の父親とその子どもの2人がレギュラーメンバーとして与えられました。料理教室では、関口美樹、高戸かおり、前田シェフ、渡久地芳子、羅恩姫、深江徹の諸先生方が指導にあたって下さいました。

その他、教会の扉を開く業としての、バザー、クリスマス・コンサート、青年の夕べ、福島県郡山の親子を招待しての保養キャンプ、さらには国立ハンセン病療養施設大島青松園「霊公会」での礼拝奉仕など、その全ては、立川教会として目を覚ましていることの証しの業でした。

そのことが実現出来たことの、言葉では言い尽くし得ない神様への感謝を覚えつつ、しかし、それでもなお、私たちに足らざるものがあるように思います。

それは、祈りです。

礼拝と並ぶ教会の柱である祈祷会、それが私たちの課題です。

確かに、週報に記載する教会員及び教会関係者を覚えての祈りは取り組まれています。

しかし、祈祷会を、礼拝と同じだけの重さを持って担う人々の少なさを思うのです。

皆で祈りを合わせる事がなければ、教会は神様の御業から離れて行きます。

教会創立70周年を迎えるこの時、私たちは今一度、自分のため、隣人のため、そしてこの立川教会の今とこれからの歩みのために祈りを合わせて行きたいと思います。

そして、主日礼拝以外に祈祷会をも覚えて行きたいと思います。

高齢者にとって夜の祈祷会は難しくなりました。

昼間に移し、一人でも多くの方の参加を待ちたいと思います。

祈りましょう。